

本日、東京医科歯科大学 大学院修士課程、博士課程の学位を取得された皆さん、修了誠におめでとうございます。

皆さんが今日 学位を取得されたのは、ご自身の努力もさることながら、指導教員、ご家族や友人その他の方々のお力添えがあつてのことだと思ひます。改めて、入学以来、変わらぬご支援をいただいたご家族及び関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

This year marks the first time we have had three graduates from the joint degree program established with Mahidol University, and we are also honored to have Dr. Nuttawut with us. Thank you very much.

パンデミックがようやく収束しつつあり、コロナ前の日常が戻つてきたことを実感する今、無事に学位記授与式を挙行できることを心より嬉しく思ひます。

今年は元日から能登半島地震が発生し、大変な被害で多数の方々が被災し、犠牲となられました。現在も通常の生活には戻らず、苦しい状況に置かれていられる方々が多数おられることに心を痛めております。本学からは医師や看護師、救急救命士など多職種で構成された職員 27 名が現地で支援活動を行いました。彼らは、インフラが復旧しない過酷な環境の中で、医療支援を行い、被災者のために献身的な活動を行いました。残った職員が一丸となつて業務を行うことで、間接的に支援を行い、今の自分たちにできる最大限のことを行つています。

今回の能登半島地震への派遣においても、本学のコロナ対応においても共通して言えることですが、我々は「世のため人のため」という、普遍的な価値を皆が共有し、非常時ゆえのことですが、その「普遍的な価値」が、職員を一つにし、それぞれの専門領域を超えた協力体制に繋がりました。

これらの事例が示す通り本学のような医療系大学の最終目標は、優れた研究成果を上げるだけでなく、その成果を社会に還元することにあります。大学病院における診療はその直接的な表現ですが、それに留まらず産官学連携による人材開発や研究の社会実装はより大きな社会貢献を生み出すと考えています。大学院の修士課程及び博士課程は皆さんにとって自分の未来への投資であつたと思ひます。

皆さんの中には、コロナ禍に十分な研究生活を送れず、まだ一人前の研究者とは言えないと思われる人もいるかもしれませぬ。しかし、皆さんには過去を悔やむのではなく、過去から教訓を見出し、未来を創りだしてほしいと思ひます。人生 100 年時代と言われる

今、失われた機会を取り戻すことではなく、よりよい形で新たな機会を創出することに重きを置いていただきたいと思います。

皆さんの中には、これから社会で活躍する人もいれば、博士課程に進み本格的な研究を続けられる人、アカデミアなどで研究を続ける人もいます。異なる道に進んでも、東京医科歯科大学大学院で研究したという縁を大切に、弛まぬ努力を続け、リサーチマインドを磨き続けていただきたいと思います。

そもそも博士という学位は、独立した研究者、すなわち自ら課題を発見し、それを科学的に何らかの形で解決できる能力を証明するものです。しかし、日進月歩発展する医学において、学びに終わりはありません。そのためには、学びなおしの重要性は日々増すばかりです。情報化社会において様々な知識に触れる機会はあっても、体系化した知識やスキルとして、しかも質が保証された形で学ぶことは容易ではありません。

東京医科歯科大学は、生涯教育の時代だからこそ、医療者として、研究者として、人間として、成長を続ける皆さんにとって、どの状況においても、また戻ってきて学べる場、更に成長できる場でありたいと考えています。

本学は10月には東京工業大学と統合します。多彩な見識を持つ仲間が増えることで、新たな医療価値を創出し、学びなおしの場としても一層の強みを持つと考えています。

皆さんにとって、東京医科歯科大学は母校です。母校とは、母港、母なる港でもあります。船は母港で整備を終えて長い航海に出ていき、次の航海に備えるために母港に戻ってきます。名前が変わっても、組織が変わってもこの地に母港があることに変わりはありません。東京医科歯科大学も東京科学大学も、今後も皆さんを将来にわたり応援して参ります。

皆さんの幸せな未来を教職員一同祈念しつつ、お祝いの言葉と致します。

本日は誠におめでとうございます。

2024年3月15日

東京医科歯科大学 学長 田中 雄二郎